定着演習

木曾の最期　―義仲の死―

得点　／50

目標時間　30分

KT17004

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（字数制限のある場合は、句読点・括弧も字数に数える。）

今井四郎、木曾殿、主従二騎になつてのたまひけるは、「日ごろは何ともおぼえぬ鎧が、今日は a重うなつたるぞや。」今井四郎申しけるは、「ア御身もいまだ疲れさせ給はず、御馬も弱り候はず。①何によつてか、一両の御着背長を重うはおぼしめし候ふべき。それは、御方に御勢が候はねば、臆病でこそ②さはおぼしめし候へ。兼平一人候ふとも、余の武者千騎とおぼしめせ。矢七つ、八つ b候へば、しばらく防ぎ矢つかまつらん。あれに見え候ふ、粟津の松原と申す。あの松の中で御自害候へ。」とて、打つて行くほどに、また新手の武者、五十騎ばかり出で来たり。「君はあの松原へ入らせたまへ。兼平はこの敵防ぎ候はん。」と申しければ、木曾殿 c のたまひけるは、「義仲、都にて③いかにもなるべかりつるが、これまで逃れ来るは、なんぢと一所で死なんと思ふためなり。ところどころで討たれんよりも、ひとところでこそ④討ち死にをもせめ。」とて、馬の鼻を並べて駆けんとしたまへば、今井四郎、馬より飛び降り、主の馬の口に取りついて d 申しけるは、「弓矢取りは、年ごろ日ごろいかなる高名候へども、最期のとき不覚しつれば、長き疵にて候ふなり。イ御身は疲れさせ給ひて候ふ。続く勢は候はず。敵に押し隔てられ、⑤言ふかひなき人の郎等に組み落とされさせ給ひて、討たれさせ給ひなば、『さばかり日本国に聞こえさせ給ひつる木曾殿をば、それがしが郎等の討ち奉つたる。』なんど申さんことこそ⑥くちをしう候へ。ただあの松原へ入らせ給へ。」と申しければ、木曾、「さらば。」とて、粟津の松原へぞ駆けたまふ。

（『平家物語』より）

(一) 二重傍線部 a には二種類の音便が用いられている。音便の種類を、使われている順に答えよ。（各3点）

〔　　〕〔　　〕

(二) 二重傍線部 b・c・d について、(1) 敬語の種類と、(2) 誰から誰への敬意を表しているかを例にならって答えよ。（完答各3点）

【例】(1)〔尊敬語〕(2)〔作者→姫〕

b (1)〔　　〕(2)〔　　〕
c (1)〔　　〕(2)〔　　〕
d (1)〔　　〕(2)〔　　〕

(三) 傍線部①・④・⑤を現代語訳せよ。（各4点）

①〔　　〕
④〔　　〕
⑤〔　　〕

(四) 傍線部②の「さ」は指示語である。指し示す内容を本文中から抜き出し、最初の三字と最後の三字を答えよ。（句読点は字数に数えない。）（完答4点）

□□□～□□□

よく出る

(五) 傍線部③の現代語訳として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えよ。（4点）

ア　どうにか生きていくつもりだったのが、
イ　いかに行動すべきか知ってはいたが、
ウ　どのような処罰も受けるつもりだったのが、
エ　きっと死ぬはずだったが、

〔　　〕

よく出る

(六) 傍線部アとイとでは、今井四郎は全く逆のことを言っているが、なぜか。その理由を五十字以内で説明せよ。（6点）

(七) 傍線部⑥について、今井四郎はなぜそう言ったのか。本文中から、その根拠となる一文を抜き出し、始めの五字を答えよ。（5点）

(八) 『平家物語』における文体上の特徴を一語で答えよ。（4点）

〔　　〕